

障害者週間から始まる、アートを通して共生・多様性について考える18日間

# CONNECT

2021 12.2 THU — 19 SUN

スペシャル鼎談 つながる・つづく・ひろがる

## 生まれかわる美術館、大学、劇場から考える文化と共生

### 青木 淳 氏

(京都市京セラ美術館長・建築家)

### 赤松 玉女 氏

(京都市立芸術大学長・画家)

### やなぎみわ 氏

(美術作家・舞台演出家)



赤松玉女氏

青木 京都市立芸術大学の毎年度末の作品展は、全学年の学生が参加してこれをメイン会場に展示しますので、大変ご縁があります。明治維新を境に天皇や公家をはじめ、多くの職人たちが揃って京都から東京に移り住みました。京都で活躍していた絵師たちはそういった状況に危機感を抱き、自ら建設計画を提出し、資金を集め、京都芸大の前身である京都府立学校を立ち上げます。彼らは、芸術や文化には経済活動を活性化し、地域や人々を結びつける力があることが分かっていたはずですが、この美術館の建設の経緯にもその力を感ずります。だからこそ当時の美術家たちも積極的に参画したのだと思います。反面、絵を描く、工芸品を制作するという活動は非常に個人的なことで、当然、作品は一点一点違っていていいはず。その意味で、芸術はあらかじめ多様性を内包しているのだと思います。

やなぎ この美術館には子どものころから父親に連れられて毎年足を運んでいました。京都芸大に進学し、1年生のときに進級制作展でこの作品が並んだときは本当にうれしかったです。それも含め、学内の制作展には大学院修了まで6回出品しました。それ以降はここで展覧会に参加する機会がありませんでしたが、1997年に久しぶりで作品を展示しました。そのときは地下も展示スペースに使用され、建物の外にはカフェが店舗してにぎやかでした。地下には接取時代の英語の落書きが残っていたのも印象に残っています。最近、現代アートの展示施設ができ、若い人が出入りするようになって、うれしく思います。

赤松 京都芸大の美術学部では入学から半年間、学科や専攻に関係なく混成クラスを編成し、新入生は総合基礎美術という授業を受講します。教員も専門の枠を越えて参加し、授業内容は毎年見直します。ワークショップや制作、学外研修などを通して、見る、創る、伝えるといった造形芸術では基本となるテーマの課題に取り組みます。最初から狭い領域で一つの目的に向かおうと走り始めると、余裕がない分、後々に硬直化する問題に直面します。これは、芸術を軸に多様性や柔軟さを持つ人材を育成するための、京都芸大の古くからの伝統です。学科や専攻が違えば、同世代でも価値観は異なりますし、教員もそれぞれ個性を持っていますので、広く交流することで視野が広がり、成長にもつながると期待しています。

やなぎ 入学してすぐの授業では廃車を解体することに、大変驚きました。染織専攻だったので、その後は毛筆画を描き、型や禪の技法を学びます。この12年間、舞台作品の制作を続けています。が、何をしてもいいという感覚は廃車の解体が原点がもたらした。現代美術の分野で活動する中でも、展示スペースの白い壁に作品を掛けることに違和感がありました。転機になったのが、京都国立近代美術館での2011年の「王ホワイナジ展」展期中に展示会場で上演した演劇作品です。ホワイトキューブの展示室の中にブラックボックスを作ったり、演出として美術館の所蔵品を別の品物に勝手に入れ替えたこともありました。今考えると、よくやらせてもらえたなと思います。青木、今の話を聞くと、やなぎさんの代表作である「エレベーター・ガール」などの写真作品も演劇につながっていると感じます。



青木淳氏

青木 実は建築も同じで、この美術館も何度も改修が施され、流動的に動いています。先ほど進駐車が残った地の落書きの話がありましたが、この建物を使っていた人の痕跡や記憶も建物には刻まれています。今回、大規模なリニューアル工事を行いました。これは最終的には建物、すなわち現在形と連続しているものの、一つの切断面が見えているにすぎないのだと改めて感じています。

赤松 作品は作家のある一面を切り取ったもので、作品が完成するまでには下絵づくりや取材から始めて、制作に入っても何枚も描いた、試行錯誤を繰り返したりする長いプロセスがあります。作家自身も変化したり、ふれたりしますが、それが生きていくことだと思っています。京都芸大には芸術資源研究センターという機関があり、「芸術大学」という創造の場が日々生まれる創作物を単なる記録ではなく、再活用のできる新たな芸術資源として捉え直すための活動を行っています。いわば教育と創作活動のリンクです。それが次世代の人たちとうまく結びつけば、芸術の未来を切り開き、つなげていけるのではないかと考えています。

青木 今年で2回目の開催となる「CONNECT」は、アートを通して文化の多様性や共生について考えるプロジェクトです。障害のある方の芸術活動を支援するほか、障害の有無を越えて芸術や文化に親しんだり、相互理解を深めたりする機会を提供します。美術館が「CONNECT」に参加するということは、逆に言えば、それを妨げるバリア（障壁）があるということです。美術館自体がある種の制度です。それがバリアになっていないかと考えています。京都市美術館は1933年に開館しました。建物は関西の財界や美術界、市民の寄付によって建設されました。戦後、進駐軍によって接収されていた時期を経て、京都市美術館として再出発します。2020年にリニューアルオープンし、現代アート展示に対応した新館を開設するなど、同時代的な活動にも積極的に関わっていかなくてはなりません。お二人は京都市立芸術大学京セラ出身ですので、この美術館で展示などの経験もあるのではないのでしょうか。

赤松 京都芸大の美術学部では入学から半年間、学科や専攻に関係なく混成クラスを編成し、新入生は総合基礎美術という授業を受講します。教員も専門の枠を越えて参加し、授業内容は毎年見直します。ワークショップや制作、学外研修などを通して、見る、創る、伝えるといった造形芸術では基本となるテーマの課題に取り組みます。最初から狭い領域で一つの目的に向かおうと走り始めると、余裕がない分、後々に硬直化する問題に直面します。これは、芸術を軸に多様性や柔軟さを持つ人材を育成するための、京都芸大の古くからの伝統です。学科や専攻が違えば、同世代でも価値観は異なりますし、教員もそれぞれ個性を持っていますので、広く交流することで視野が広がり、成長にもつながると期待しています。

やなぎ その一方で、今の私の演劇作品は野外劇が多くなりましたが、天候や気温にも左右されますし、人の心や身体も周囲の影響を受けます。すべてが流動的で、スタティック（静的）で定まったものはありません。ですから、公演の前後には静した世界に行きます。夜の果樹園に降り、桃の樹の写真を撮っています。夜中に暗箱カメラを用い、1分から2分ほどシャッターを開け、懐中電灯で対象を照らして撮影します。その光だけを頼りにして感光板に画像が定着すると、そこに止まった世界が現れますので、すごく安心しますね。

赤松 作品は作家のある一面を切り取ったもので、作品が完成するまでには下絵づくりや取材から始めて、制作に入っても何枚も描いた、試行錯誤を繰り返したりする長いプロセスがあります。作家自身も変化したり、ふれたりしますが、それが生きていくことだと思っています。京都芸大には芸術資源研究センターという機関があり、「芸術大学」という創造の場が日々生まれる創作物を単なる記録ではなく、再活用のできる新たな芸術資源として捉え直すための活動を行っています。いわば教育と創作活動のリンクです。それが次世代の人たちとうまく結びつけば、芸術の未来を切り開き、つなげていけるのではないかと考えています。

青木 今年で2回目の開催となる「CONNECT」は、アートを通して文化の多様性や共生について考えるプロジェクトです。障害のある方の芸術活動を支援するほか、障害の有無を越えて芸術や文化に親しんだり、相互理解を深めたりする機会を提供します。美術館が「CONNECT」に参加するということは、逆に言えば、それを妨げるバリア（障壁）があるということです。美術館自体がある種の制度です。それがバリアになっていないかと考えています。京都市美術館は1933年に開館しました。建物は関西の財界や美術界、市民の寄付によって建設されました。戦後、進駐軍によって接収されていた時期を経て、京都市美術館として再出発します。2020年にリニューアルオープンし、現代アート展示に対応した新館を開設するなど、同時代的な活動にも積極的に関わっていかなくてはなりません。お二人は京都市立芸術大学京セラ出身ですので、この美術館で展示などの経験もあるのではないのでしょうか。

赤松 作品は作家のある一面を切り取ったもので、作品が完成するまでには下絵づくりや取材から始めて、制作に入っても何枚も描いた、試行錯誤を繰り返したりする長いプロセスがあります。作家自身も変化したり、ふれたりしますが、それが生きていくことだと思っています。京都芸大には芸術資源研究センターという機関があり、「芸術大学」という創造の場が日々生まれる創作物を単なる記録ではなく、再活用のできる新たな芸術資源として捉え直すための活動を行っています。いわば教育と創作活動のリンクです。それが次世代の人たちとうまく結びつけば、芸術の未来を切り開き、つなげていけるのではないかと考えています。

やなぎ その一方で、今の私の演劇作品は野外劇が多くなりましたが、天候や気温にも左右されますし、人の心や身体も周囲の影響を受けます。すべてが流動的で、スタティック（静的）で定まったものはありません。ですから、公演の前後には静した世界に行きます。夜の果樹園に降り、桃の樹の写真を撮っています。夜中に暗箱カメラを用い、1分から2分ほどシャッターを開け、懐中電灯で対象を照らして撮影します。その光だけを頼りにして感光板に画像が定着すると、そこに止まった世界が現れますので、すごく安心しますね。

赤松 作品は作家のある一面を切り取ったもので、作品が完成するまでには下絵づくりや取材から始めて、制作に入っても何枚も描いた、試行錯誤を繰り返したりする長いプロセスがあります。作家自身も変化したり、ふれたりしますが、それが生きていくことだと思っています。京都芸大には芸術資源研究センターという機関があり、「芸術大学」という創造の場が日々生まれる創作物を単なる記録ではなく、再活用のできる新たな芸術資源として捉え直すための活動を行っています。いわば教育と創作活動のリンクです。それが次世代の人たちとうまく結びつけば、芸術の未来を切り開き、つなげていけるのではないかと考えています。

青木 今年で2回目の開催となる「CONNECT」は、アートを通して文化の多様性や共生について考えるプロジェクトです。障害のある方の芸術活動を支援するほか、障害の有無を越えて芸術や文化に親しんだり、相互理解を深めたりする機会を提供します。美術館が「CONNECT」に参加するということは、逆に言えば、それを妨げるバリア（障壁）があるということです。美術館自体がある種の制度です。それがバリアになっていないかと考えています。京都市美術館は1933年に開館しました。建物は関西の財界や美術界、市民の寄付によって建設されました。戦後、進駐軍によって接収されていた時期を経て、京都市美術館として再出発します。2020年にリニューアルオープンし、現代アート展示に対応した新館を開設するなど、同時代的な活動にも積極的に関わっていかなくてはなりません。お二人は京都市立芸術大学京セラ出身ですので、この美術館で展示などの経験もあるのではないのでしょうか。

赤松 作品は作家のある一面を切り取ったもので、作品が完成するまでには下絵づくりや取材から始めて、制作に入っても何枚も描いた、試行錯誤を繰り返したりする長いプロセスがあります。作家自身も変化したり、ふれたりしますが、それが生きていくことだと思っています。京都芸大には芸術資源研究センターという機関があり、「芸術大学」という創造の場が日々生まれる創作物を単なる記録ではなく、再活用のできる新たな芸術資源として捉え直すための活動を行っています。いわば教育と創作活動のリンクです。それが次世代の人たちとうまく結びつけば、芸術の未来を切り開き、つなげていけるのではないかと考えています。

やなぎ その一方で、今の私の演劇作品は野外劇が多くなりましたが、天候や気温にも左右されますし、人の心や身体も周囲の影響を受けます。すべてが流動的で、スタティック（静的）で定まったものはありません。ですから、公演の前後には静した世界に行きます。夜の果樹園に降り、桃の樹の写真を撮っています。夜中に暗箱カメラを用い、1分から2分ほどシャッターを開け、懐中電灯で対象を照らして撮影します。その光だけを頼りにして感光板に画像が定着すると、そこに止まった世界が現れますので、すごく安心しますね。

赤松 作品は作家のある一面を切り取ったもので、作品が完成するまでには下絵づくりや取材から始めて、制作に入っても何枚も描いた、試行錯誤を繰り返したりする長いプロセスがあります。作家自身も変化したり、ふれたりしますが、それが生きていくことだと思っています。京都芸大には芸術資源研究センターという機関があり、「芸術大学」という創造の場が日々生まれる創作物を単なる記録ではなく、再活用のできる新たな芸術資源として捉え直すための活動を行っています。いわば教育と創作活動のリンクです。それが次世代の人たちとうまく結びつけば、芸術の未来を切り開き、つなげていけるのではないかと考えています。



やなぎみわ氏

やなぎ この美術館には子どものころから父親に連れられて毎年足を運んでいました。京都芸大に進学し、1年生のときに進級制作展でこの作品が並んだときは本当にうれしかったです。それも含め、学内の制作展には大学院修了まで6回出品しました。それ以降はここで展覧会に参加する機会がありませんでしたが、1997年に久しぶりで作品を展示しました。そのときは地下も展示スペースに使用され、建物の外にはカフェが店舗してにぎやかでした。地下には接取時代の英語の落書きが残っていたのも印象に残っています。最近、現代アートの展示施設ができ、若い人が出入りするようになって、うれしく思います。

赤松 作品は作家のある一面を切り取ったもので、作品が完成するまでには下絵づくりや取材から始めて、制作に入っても何枚も描いた、試行錯誤を繰り返したりする長いプロセスがあります。作家自身も変化したり、ふれたりしますが、それが生きていくことだと思っています。京都芸大には芸術資源研究センターという機関があり、「芸術大学」という創造の場が日々生まれる創作物を単なる記録ではなく、再活用のできる新たな芸術資源として捉え直すための活動を行っています。いわば教育と創作活動のリンクです。それが次世代の人たちとうまく結びつけば、芸術の未来を切り開き、つなげていけるのではないかと考えています。

やなぎ その一方で、今の私の演劇作品は野外劇が多くなりましたが、天候や気温にも左右されますし、人の心や身体も周囲の影響を受けます。すべてが流動的で、スタティック（静的）で定まったものはありません。ですから、公演の前後には静した世界に行きます。夜の果樹園に降り、桃の樹の写真を撮っています。夜中に暗箱カメラを用い、1分から2分ほどシャッターを開け、懐中電灯で対象を照らして撮影します。その光だけを頼りにして感光板に画像が定着すると、そこに止まった世界が現れますので、すごく安心しますね。

鼎談の全編はCONNECTの公式WEBサイトで公開中



障害者週間から始まる、アートを通して共生・多様性について考える18日間

# CONNECT

つながる・つづく・ひろがる

参加無料 FREE

京都国立近代美術館、京都市京セラ美術館、京都市動物園、京都府立図書館、ROOMシアター京都、京都市勤業館みやこめっせ、kokoka京都市国際交流館、京都文化博物館、京都芸術センター ほか

主催/文化庁、京都国立近代美術館 共催/京都府、京都市、京都新聞 お問い合わせ/CONNECT事務局 TEL.075-225-9757 (受付時間/平日10時~17時) FAX.075-255-9763 MAIL:connect-art@mb.kyoto-np.co.jp



企画・制作=京都新聞COM